
兎と狼と

泉 飛白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兎と狼と

【Nコード】

N8842X

【作者名】

泉 飛白

【あらすじ】

ある日、散歩をしていた兎が可愛い狼を家に持ち帰り、食べてしまおうと思いながら清く正しい？お付き合いから始まる物語です。

あらすじと内容が異なる場合があります、ご注意ください。

1歩 兎と狼と出会い

クスンクスンという泣き声が聞こえて1匹の兎の獣人が何事だと近づく。

「……」

そして無言で立ち去ろうと来た道を引き返すために踵を返すが、気付かれたのか視線を感じて振り向く。

「……?」

コテンと小首を傾げた1匹の小柄の狼の獣人。その顔はキョトンとしていてる。泣きすぎて赤くなった眼が大変に庇護欲をそそるが、兎は騙されなかった。

例え、無言で詰め寄り座り込んだ狼に目を合わせるためしゃがみ込んで、目元の涙を舐めるために顔を近づけていたとしてもだ。

「ひゃっ!」

「……っ!」

身を大きく震わせた小さな狼に胸を貫かれたような感覚を味わった兎は堪らなくこの可愛らしい狼を抱き締めたいという欲望を我慢した。

だが、兎の眼が異様にギラギラと輝いている。

「た、食べないで!」

「……… 兎は一応草食動物だあ」

「……?」

グズグズと鼻を吸いながら狼は小首を傾げたのを見ながら、とりあえず兎は狼をお持ち帰りすべく抱き上げた。

小さく悲鳴を上げた狼の体温は異常なほどに熱いのを知った兎は寒くならないように腕の中にきっちり収める。

「風邪引いてんだ。外うるちよろすんな、酷くなっちまうだろ」

「はう、ごめんなさい」

ピッタリと身体をくっつけてくる狼の警戒心の無さに兎が心配するなど後にも先にもこれだけの話だろう。

ゴロゴロと喉が鳴るような音がするが幻聴だろうと兎はもう自分は末期かも知れないなどと考えていた。

「…寝やがった」

一応は異性なのだから意識くらいしないかとか思いながら、兎は自分の家に向かってゆったりと足早に向かう。

息をする小さな口から覗く可愛らしいとはとてもいえない立派な牙が見え隠れするのを見ながら、兎はゴクリと喉を鳴らして唾を飲み込んだ。

家に付くとまずは粗末な寢床に狼を優しく寝かせて毛布を掛けたから兎は水を汲みに行き、未使用の手拭いを濡らして絞り額に乗せた。

「ん…」

「なんだあ、起きちまったのか。まだ、寝てろ」

「…うん」

コクリと素直に頷く可愛らしい狼に悶える兎はハツとして口にした。

「オレの名前はレオナルド。アンタは名前なんてんだあ？」

「ん…私、アメリカ」

「アメリカかあ。可愛い名前」

そう言い微笑んだレオナルドにアメリカはさらに顔を真っ赤にした。それに気づかず料理を作りに行ったレオナルドの姿を最後まで見て、頭まですっぽりと毛布を被り小さく丸まった。

アメリカは非常に恥ずかしい思いをしている。食べやすいお粥を作ってくれたレオナルドが“あーん”を強要してきたからだ。

恥ずかしげに口を開けたアメリカにはそれは非常に熱く思わず「はちゅい」と言っ赤い舌を出し、耳がへにゆりとした姿にレオナルドは素直にいうと欲情した。

現在はレオナルドが“ふーふー”と冷やしてから“あーん”がされていて他者が見たら完全に恋人同士だ。

「ごちそうさまです」

「ん。なら、今度は薬を…」

パフリと倒れ込み早々に寢床に毛布を被り丸まったアメリカにレオナルドは呆れ果てたというか、頬を弛めた。

「アメリカ」

優しくそう呼ぶともぞもぞと動き、顔だけを出したアメリカはレオナルドを上目遣いで見上げたのが悪かった。

風邪で潤んでいる瞳と口で息をしているため開いた唇。それで今まで繋ぎ止めていた理性がプチリと切れた。

毛布を剥ぎ取りその身体を組み敷き、桃色の小さな唇に己のそれを軽く合わせたレオナルドはすぐに離れた。

恐怖に染まったアメリカは固まって声も出なかったが、レオナルドが舌舐めずりをするのを見てやっと声を出した。

「食べないで！」

ギョツと眼を閉じそう叫んだアメリカを見てレオナルドは可笑しそうにクツクツと笑った。

「確かに食うけど、アメリカが思ってる食うじゃねえなあ」

「……？」

「まあ、美味しく頂かないとなあ」

小さな悲鳴を上げて逃げようとするアメリカにレオナルドは優しく口付けを落としていく。

ビクビクと震えるアメリカを見ながら、低く甘い優しい声でレオナルドは伝えた。

「好きだあ」

「ふえ？」

「愛してる、アメリカ」

新しく溢れ出すアメリカの涙を舐めとりながら、視線をしつかりと合わせた。

「オレと結婚してほしい、アメリカ」

「…けっこ、え？」

「襲う前に知つといてほしいからなあ」

“ちんぷんかんぷん”なアメリカに苦笑を浮かべたが、今更引くわけにも行かないレオナルドは深く接吻した。
小さな身体がパタパタと暴れて思わず離す。

「はあ…あ、その…私のこと好き？」

「大好きだ」

「…ほんと？」

「嘘はつかねえ」

もじもじと動き始めた。恥ずかしいのか、顔を俯かせたアメリカにレオナルドはまどろっこしく襲おうかと恐ろしいことを考え始めた。

「レオニヤルド…」

「…っ！」

名前を囁んだアメリカに萌えながら、やはり待とうと思いき直すと同時に可愛いがもう一度やられたら変な方に目覚めてしまいそうだとレオナルドは思った。

「レオでいい」

「ん、レオ。あのね、こんなの初めてだから、あの」

「胸、ドキドキするだろ？」

コクリと頷いて見せたアメリカにレオナルドは例え吊り橋効果だろうが何だろうがこっちのモノだとニヤリと笑った。
そつと小さな手を自分の胸に押し当てた。

「オレもドキドキする。アメリカが好きだからドキドキするんだあ」
「…私、レオのこと好き？」
「さあな、そうだ。まだ、薬飲ませてなかったな」

おもむろにレオナルドは錠剤を口に放り込み水を含むとアメリカと口を合わせた。コクリと喉がなったのを確認したレオナルドはゆっくりと唇を放した。

そして零れ伝う雫を舌から掬うように舐めとり艶やかな表情で微笑んだ兎に狼はヒツと小さく怯えた。

2歩 兎と狼と挨拶

「やっぱり私のこと食べちゃうんだあ！」

「確かにオレは兎以外の血も流れてるが違うからな。オレは肉より魚が主食だ」

律儀に答えたレオナルドは実際に肉よりは魚であるが肉も食べる。見た目こそ兎の獣人だが多種多様に流れる血でレオナルドは完全な草食ではない。

見た目に騙されると痛い思いをする事がある。

「ほんとに食べない？」

「うん、食べない」

食事という意味で同じ獣人を食べることは普通の状況ではありえない。違う種族だろうがそれは関係ない。

だから、レオナルドは下心からの食べるという発言をただけだ。

ピクピクと揺れ動くアメリカの耳をさわさわと触りながらレオナルドは白く細い首筋に吸い付いた。

「アメリカ」

「……」

「……？」

首筋から顔を放すと安心してしまったアメリカが寝ていた。困ったように、穏やかに、そして安心したように微笑んだ。

寝てしまったからには何もしようがないのでレオナルドはとりあ

えず持て余した熱を冷ますために水浴びに行くことにし、アメリカにしっかり毛布を掛け、額に口付けをした。

「おやすみ、アメリカ」

そうして静かに出て行った。しばらくするとレオナルドは長髪の毛をわしゃわしゃと拭きながらアメリカの眠る寢床に近付いた。

額に冷えた手をソツと乗せると身を振るわせたが目覚める気配がないのにホツとしながら、熱が下がっていることにレオナルドは微笑んだ。

水浴びをしたレオナルドの体温は下がっているから隣に潜り込むのは止め、古い毛布を引っ張り出して身を包み長椅子に横たわり近くの本を枕にして眠りについた。

もぞもぞと何かを探し動いていたアメリカはないと気付くとパチリと目を開けて周りを見渡した。そして長椅子に寝ているレオナルドを見つけた。

スツと足を出して冷たい床に足を着けてしまったアメリカは小さく身を振るわせ、毛布をしっかり巻き付けトコトコと音が立つような歩みでレオナルドの元に行った。そうして毛布を一度レオナルドに掛け、アメリカはレオナルドの毛布の下に潜り込みピッタリと張り付き満足げに眠る。

「ん……？」

ぼんやりと意識を浮上させたレオナルドは違和感に首を傾げた。そうして目を開けばその違和感の正体に気づき、自分の腕の中に閉じ込め少しの間だけ堪能してからしつかり抱き締めて寝床に向かった。

目が冴えたレオナルドは指先で頬を突いたりしながらアメリカの寝顔をまた眺め始めた。ピクツと稀に動く耳、擦り寄ってくる姿、時たま不機嫌そうにする顔を見てニヤニヤと笑う。

「んう」

もぞもぞと動きながらレオナルドに背を向けたアメリカは居心地の良い場所を探すためにしばらく動いてから落ち着いた。

背を向けられたことを残念に思いながら腕にしっかりと抱きしめてレオナルドは寝ることにした。

「ん？」

腕にしがみつかれた感覚に不思議な感じがしたレオナルドは困ったような顔をしたがすぐに目を瞑り、鼻をくすぐる甘い匂いに包まれ眠りに落ちた。

窓から入る日差しでパチリと目が覚めたアメリカは首を傾げて大人しくレオナルドの腕の中で考えに耽った。

まだ規則正しい寝息が聞こえているのだからレオナルドは寝ていると考えたアメリカは暖かな人の体温を感じながらうとうととまた眠りそうになった。

「アメリカ、起きたのかあ？」

「起きてたの、レオ」

「ん、今起きた」

眠たげな声で低く問いかけたレオナルドに対して何ら変わりもなく答えたアメリカはクルリと身体を反転させてふわっと花のような笑みを浮かべた。

「レオ、おはよう」

「おはよ、アメリカ」

愛らしい笑みをすっかりと目に納めたレオナルドはのろのろとした動きでチュツと両頬にキスをして、再び目を閉じて腕にアメリカを閉じ込めた。

「あれ、朝だよ、レオ？」

「もちよつと……なあ」

背中を優しく撫でながら柔らかい身体にピタッと動きを止めて目を開き、アメリカを離して起き上がった。

「レオ？」

「ん、起きる。美味しい朝飯食わせてやるからなあ」

「うん」

水色の髪についた癖を直すために撫でつけてレオナルドは素早く立ち上がってアメリカから離れた。

パチクリと瞬きしたアメリカは小首を傾げて髪を指で梳いて整えながらジツと目はレオナルドを見つめている。

「ちよつと待ってるお。魚捕ってくるから、少しの間お留守番だ」

「うん、頑張るね。いつてらっしやい、レオ」

無邪気に笑ってアメリカは手を振った。チラツとその様子をみたレオナルドは何とも言えない衝撃に数秒固まったが直ぐに近くの川に向かう。

アメリカはとりあえず立ち上がって周りをキョロキョロと見渡し始めた。

パタパタと尻尾を嬉しそうに振りながら安心できるレオナルドの匂いの染み付いた毛布をギュツと腕に抱きしめて部屋をウロウロと動く。

さして気に止めるような物もなくアメリカは先程まで寝ていた寝床にポスリと倒れ、スリスリと身体を寄せた。

しばらくするとピクピクと耳を動かし、ガバツと起き上がり出て行った場所に目をやるとちょうど戻ってきたレオナルドと目が合い、アメリカはその瞬間満面の笑みを浮かべて言った。

「お帰りなさい、レオ」

それに目を見開き驚いたがすぐにレオナルドも微笑み照れ臭そうに口を開いた。

「ただいま、アメリカ」

そして兎はたまらず魚の入った荷物を置くと愛らしい狼を自分の腕の中に閉じ込めた。

3 歩 兎と狼と食事

「ずいぶんとワイルドだな」

それがアメリアの食事の仕方を見た第一声だった。

ガブリと大きな口を開けて焼き魚にかぶりつく姿はとても野性的だ。

可愛らしい容姿に似付かない姿だが、それも愛らしく見えるのは惚れた欲目なのだろうかレオナルドは思った。

「ん？」

「いや、美味いか？」

小首を傾げて見つめてきたアメリアに優しく聞くとコクリと頷き笑顔を浮かべた。それに頬を緩めながらレオナルドも食べ始めた。

ご飯を口いっぱい頬張ったアメリアはもぐもぐと食べる姿は可愛らしいが、ちよつとよろしくないと密かに眉を顰める。

お腹をグルグルと鳴かせたアメリアの為に作った料理はご飯に焼き魚に味噌汁。後は漬け物という簡素な食事だ。

「ゆっくり食べても良いからな」

とレオナルドが言った矢先に喉に詰まらせうつすら涙目のアメリアに顔を青くして駆け寄った。

そして今は優しく背をレオナルドにさすられている。

「誰も横取りしないし、急かさないから、ゆっくり食べる、いいな

「？」

「う、ごめんなさい」

「別に怒ってないから謝んな」

心配しているレオナルドの顔は険しく怒っていると勘違いしているアメリカは新しく涙を溜めた。

「で、でも…顔怖い」

「この顔は元からだあ」

端正に整っているが切れ長の目は鋭く悪い印象を受けやすいが、その顔にハッキリと眉を下げた。

「アメリカ、心配した」

「レオ」

「心配した」

椅子に座るアメリカをギュツと身を屈め膝き抱きすくめるレオナルドの声は震えていた。

「あの、ありがとうね。私、大丈夫だから」

「ん。そうかあ」

「レオ、レオ」

スリスリとアメリカのお腹に頭を軽く押し付けていると、嬉しげに自分の名前を連呼するアメリカをレオナルドは軽く見上げた。

「大好きだよ、レオ」

「…アメリカっ！」

溜まらず食事が冷めるのも気にせず見上げていたアメリアの唇を貪るレオナルドは息が出来ず自分の胸を叩く姿を見て渋々と唇を離した。

涙を流し荒く息を吸う姿に再びときめいて襲いそうになったが何とか耐えて、舐めたら収集が付かなくなりそうだったので涙を指で拭う。

「んとね、レオ」

「なんだあ？」

「私のことアリアって呼んでくれる？」

小首を傾げて不安げに見つめてくるアメリアに思わず顔を逸らしたレオナルドを見て衝撃を受け泣き出しそうになった。

「アリア」

「ふえ？」

「…なんか、恥ずかしいな」

不意に呼ばれた名前で涙も引つ込んだアメリアはレオナルドの横顔がはにかんでいるのを見て気恥ずかしさから慌てふためいてしまった。

恥ずかしいけど目を逸らすのが勿体ないと思うがやっぱり恥ずかしくてアメリアはとうとう俯いてしまった。

「…飯、食つか」

「う、うん」

いそいそと自分の椅子に戻るレオナルドはチラッとアメリアを見

た。その瞬間に視線が絡み合い同時に顔が染まった。

「…今度はゆっくり食べよ」
「うん」

それだけ会話して残っている自分のすっかり冷めた食事を済ませることに専念し、はじめに食べ終わったレオナルドは片づけ始めた。

「レオ、美味しかった、ごちそうさま」
「そうか、ならよかった」
「あの、手伝っていい？」

椅子から立ち上がり食器を持ってきたアメリアは遠慮がちにレオナルドに聞いた。

「なら、洗ってくれるかあ」
「うん！」
「っ、気をつけるんだぞ」

パアと花のような笑みを浮かべたアメリアを抱き締めたい衝動を我慢したレオナルドはとりあえず、洗い終わった食器を拭き棚に戻しつつアメリアを盗み見る。

「レオ、終わった！」
「そうだな、終わったなあ」

レオナルドが淹れた紅茶を飲みながら和む。アメリアはまだ紅茶が熱いのか息をフーフーと吹きかけながら飲んでる。
それに頬を弛ませたレオナルドは紅茶を飲み干した。

「ねえ、レオ」

「ん、なんだあ？」

ジッと大きな瞳に見つめられて首を傾げるレオナルドは少し居心地の悪い気分になった。見つめられるのは嬉しいが視線が明らかに頭上。

「レオの耳、触りたい」

「…耳を、かあ？」

顔がひきつる。思わず耳と尻尾を隠し、人と同じようにしてしまったレオナルドにアメリカは目を丸くした。

「凄い。私、まだ一人前じゃないから隠せないのに」

「練習すれば隠せるようになる。オレも時間かったからなあ」

「そっかあ、私も頑張るね」

ニコニコと笑いながらアメリカは兎の耳を再び触らせてとせがまれてレオナルドは苦笑いを浮かべた。

「レオ、駄目かな？」

紅茶を飲み終えた狼は兎に近付いてキラキラと輝く瞳で見つめられ根負けした兎は隠した耳を出した。

4 歩 兎と狼と羊

「ふわふわ」

「っ、もいいだろお」

「もうちょつとだけ」

くすぐったいのか僅かに身動きするレオナルドに構わず長い耳をなでなでと触るたびにピクリと揺れる耳。

「アリア、此处において」

自分の膝を叩いていまだに耳に夢中なアメリアを膝に向かい合わせに座らせた。

ついに頬ずりまでしたアメリアを抱き締めて自分は柔らかい胸を堪能しだした。

「いいなあ、ふわふわだよ」

「ん、アリアもふわふわだぜえ」

優しくアメリアの尻尾を撫で至福の一時を送っていたレオナルドはピタリと動きを止めて小さく唸った。

「ひっ、レオ怒った？」

「違う。客が来たみたいだ。ちょっと行ってくる。お留守番頼む。アリア」

「うん」

不安げなアメリアの頬に口づけて抱き締めてから膝から下ろし立ち上がったレオナルドは名残惜しいのかまた口づけた。

「誰も来ないと思うがもし来たら」

「来たら？」

「これで殴れ」

少し離れた場所にあったフライパンをアメリアに手渡した。レオナルドはニツコリと笑っているが正直恐ろしくてアメリアは後ずさる。

「本能的にヤバいと思ったら逃げろよ」

「うん」

「逃げられないならオレを呼べ。絶対に駆けつけるから、アリア」

後ずさったアメリアを右手で腰を引き寄せて左手で顎を上に向けてレオナルドは優しく目を細めた。

「愛してる、オレのアリア」

「っ！」

耳元で低音の甘い声で囁かれたアメリアはポンつと音が鳴る勢いで顔を赤らめ固まってしまったのを見たレオナルドは苦笑した。

「アリア、お留守番できるかあ？」

コクコクと声もなく頷きギュツと手渡されたフライパンを強く握った。それを見たレオナルドはチュツと触れるだけの口付けを落として微笑んだ。

「行ってくる」

「…いつて、ら、しゃい」

やっと声が出たアメリカがまた愛らしくレオナルドは顔中に口付けをした。

「早く行かないと来ちまうな」

名残惜しいがといった風にアメリカの耳に優しく触れてから頭を撫でて出掛けた。

ペタンとその場に腰を落としたアメリカはしばらく顔を真っ赤にしながらパタパタと尻尾を揺らしていた。

「おい、何しに来やがった」
「うわああ！」

ガサツと低い位置にある枝を手で押しのけて現れたレオナルドに驚いたのはふわふわの金髪に角の生えた獣人の青年が尻餅をついた。

「な、なんだ、レオナルドか」
「…なにしにきた」

低く唸るような声で脅された青年は羊の獣人でレオナルドとはそれなりに親交はあるが思わず目が潤んだ。

「耳出してるなんて珍しいな」
「崖に放り投げるぞ」

「ごめん。で、でもボク、レオナルドに知らせようと思って」

怖々としながら立ち上がり、人間達がまた獣人を狩り始めた話を聞いて深々とレオナルドの眉間にシワが寄り険しい表情になっていく。

「ボク達の所にも来るかもしれないし、一番強いのはレオナルドだからさ」

「知るか」

「ええ！？」

「オレに余裕はねえ」

手の掛かりそうな無防備すぎるアメリアを護るには出来るなら他には何もないほうがいい。

「第一、テメエは」

「ボクの名前はジェレミアだよ！」

「…知るか。その話の礼くらいは言ってもいいが、守る義理はない」

吐き捨てるようにそう言ったレオナルドはピンと耳を立てて些細な音も聞き洩らさないように静かに目を閉じ集中した。

「あ、もしかして人間が」

「黙れ」

その一声にビクツと身体を震わせ、不安げにレオナルドを見つめていたが、雰囲気が柔らかくなり口元に笑みを浮かべたのを見てジェレミアは口をあんぐりと開けた。

それを丁度目を開けたレオナルドに見られ馬鹿にされた表情で見られたがジェレミアは言葉を失った。

「とつとと消えろ、邪魔だ」

「…もしかして、つがい出来た？」

「出来てもテメエには関係ねえだろ」

プイツと顔を逸らしたレオナルドは苛立っている。それでも自分の家に帰らないと言うことはつがいがいるんだとジェレミアは理解した。

「そつか。なら、その子のこと守って上げないと」

「言われるまでもないだろ、馬鹿が」

ジロツと睨まれたじろいだが何年も付き合いがあるジェレミアはニツコリと笑っていった。

「そつえば美味しいリンゴ手に入っただけど、いる？」

「いない」

「レオナルドに聞いてないから。甘くておいしいからさ」

しばらくの沈黙の後にレオナルドは小さく取っつけ、と言って再度帰るように促した。

クスリと笑みを零したジェレミアの頭に拳を落とし、しゃがみ込んで痛みに耐える身体を蹴り飛ばした。

「そんなんだと、つがいに嫌われるぞー」

涙を浮かべ叫びながら走り去っていくジェレミアに近くにあったイガを蹴った。

「いだっ！」

「はっ、ざまーみる」

遠くで痛みを訴える声に満足げにそう良い遠ざかっていくのを確認してレオナルドはアメリカが留守番している家に一直線に走っていく。

数分も経てば家が見えてきて、そこにある気配にレオナルドは頬を弛めた。

「ただいま、アリア」

入ればペタンと床に座り込んで尻尾を振って頬を染めフライパンを握ったアメリカが上目遣いでレオナルドを見つめていた。

「可愛いなあ」

そう言つと目線を合わせるためにしゃがみエメラルド色の瞳を見つめた。アメリカは深いルビーのような瞳にちよっぴりビクつきながら目を逸らさない。

「はう」

「とりあえず、床冷たいだろ？」

フライパンを元の場所に戻し、さり気なくアメリカをお姫様抱っこして寢床に下ろした。

再び視線が絡みわたたと目線を泳がす狼の姿に笑みを浮かべた兎を見てフワツと微笑んだ。

「レオ、おかえりなさい」

5 歩 兎と狼と険悪

可愛さの余りにそのまま押し倒して恥ずかしがるアメリアに口付けを落としていくレオナルド。

「んう」

「そんな目ギョツと閉じなくてもいいだろお」

「…食べないの？」

その言葉に声を立てて笑った姿を見てアメリアはキョトンとするが、笑っているレオナルドに嬉しくなったのかパタパタと尻尾が揺れる。

「クツクツ…本当に可愛いなあ、アリア」

「レオ、恥ずかしいよ」

興が削げたのか抱き起こして膝に座らせたレオナルドは頬に口付けた。

アメリアはふわふわの長いレオナルドの耳に触れて感触をまた楽しんでいる。

「暖かいね」

「ん、そうだなあ」

ギョツと抱きついてくるアメリアは甘えるように肩に頭を擦り付ける。その様子ににやつく顔を隠しもせず抱きすくめた。

スリスリと擦りついてくるアメリアの甘く香る匂いにつっとりしていたが、レオナルドは眉を顰めた。

「…レオ？」

「また出掛けたら怒るかあ？」

「怒らないけど、寂しい」

少し陰った表情に心配かけまいとする笑みにレオナルドはキョンとくる。なんて健気なんだと思いながら垂れてしまった耳を見ながら思った。

「誰かここに来るみたいだあ」

「お客さま？」

「オレは知らないな」

ただ真っ直ぐとこちらに向かう気配に頭を傾げるしかない。

アメリカはとりあえず動こうとしないレオナルドに出掛ける様子がないのでスリスリと擦り寄せる。

「ふふ、くすぐってえ」

「ん…レオ、レオ」

「なんだあ？」

クリクリとした大きな瞳を輝かせてアメリカはチュッとレオナルドの唇に軽く自分のものを合わせた。

目を見開き固まったレオナルドに気付きもせずにもまたスリスリと擦り寄っている。

「…アリア」

「なあに」

グリグリと頭を押し付けていたアメリカが顔を上げ嬉しいのかパタパタを引きちぎれんばかりに振り愛らしい笑みを浮かべている。

「もう1回」

そのレオナルドの言葉を消さんばかりに扉を叩く、いや殴る音がこの小さな家に響き渡る。というより隔てる壁がないのだから直接に扉を殴る音が生々しくわかる。

「れ、レオ」

「ちよつとここで待ってるお」

ギュツと強くレオナルドを抱き締め、ちよつぴり涙目のアメリカに困ったように笑いながら近くの毛布を掴みかけてから自分から離し、扉へと歩いていく。

アメリカはすっかり逆立った尻尾と垂れた耳を毛布で隠してレオナルドを窺う。

「誰だあ？」

開けた扉の前にいたのは真っ黒な短髪に灰色の瞳をした狼の獣人の青年が眉間にシワが寄って立っていた。

「アメリカがいるだろ」

「…誰だ」

確信ある言葉に低く地を這うような声で言い放ったそれに相手はビクともせず眼の飛ばし合いをしている。そんな不穏な空気の中に愛らしい声が響く。

「ルカ？」

しかもこの狼の名をアメリカが口にした時点でレオナルドの機嫌は下がるところまで下がった。とたとと近づいてくるアメリカに少しの殺意を感じてしまうほどだ。

「知り合いかあ？」

「うん。あ、あのね」

その感情を抑えて優しく隣に来たアメリカに訊ねた。無邪気に笑いながら肯定し、そしてちよつと恥ずかしそうに話を続ける姿にルカと呼ばれた狼が少しだけ気を緩める。

それでもまだ不穏な空気がする雰囲気にはアメリカは気付かず、満面の笑みでレオナルドの腕にしがみつき言い放った。

「私のつがいになるレオだよ」

その爆弾発言に似た言葉に張り詰めた雰囲気は吹き飛び2匹の獣人が放心状態になってしまった。

いち早く正気に戻ったレオナルドはアメリカを抱きすくめ、唇を奪うように重ね合わせた。

それでようやく我に返ったルカが引き剥がした。

「アメリカ、脅されたんだろ」

「脅されてないもん。レオは優しいんだから！」

ムツとした顔で断定されたそれを否定して再びピッタリとくっついてきたアメリカにレオナルドは顔を綻ばせ、そしてルカに余裕の笑みを浮かべた。

「無事ならまあいい。テメエ、ちよつと面かせ」

「いいぜえ。ちょっと出掛けて来るからアリアはお留守番頼むなあ」
「…うん」

本当はこんなに可愛いアメリアを置いては行きたくはないレオナルドだが、やはり色々言いたい聞きたいことがある。

「いい子にしてたら美味しいリンゴやるからなあ」

「リンゴッ！」

「お利口さんにしてんだぞ」

コクコクと頷きながらアメリアのパタパタと尻尾が嬉しそうに動くのを見ながらレオナルドは唇に口付けた。

睨みつけてるルカは舌打ちしていちゃつく姿を視界に入れないように扉から離れた。

「行ってくる、アリア」

「ん、いつてらっしゃい、レオ」

軽く唇を合わせてレオナルドはアメリアの頭を一撫でして外に出た。

目が合うやいなや睨み合いが始まりルカはゆっくりと口を開いた。

「デメエ、何者だ？」

「いきなり何言いやがる」

「この畏怖を与えるような匂い」

そう吐き捨てるそう言いながら狼は兎にただ者じゃねえ、と呟き、さらに睨みつけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8842x/>

兎と狼と

2011年11月27日09時55分発行